

## 発達障害者のための望ましい図書館サービスのあり方 －障害の個別性と潜在的ニーズに着目して－

文化創造専攻 図書館情報学領域

17001CLM 水足 千寿瑠

### 修士論文要旨

#### 研究目的

本研究の目的は、発達障害者のための望ましい図書館サービスのあり方を検討することである。まず、図書館が発達障害者に対してサービスを行う際に注意すべき点を明らかにするために、発達障害者が抱える問題を構造化し、それを踏まえて研究計画を策定した。

#### 方法

調査は、Web上の当事者の発信するWebサイトの調査と発達障害支援者へのインタビューの二本立てである。まずWeb調査から、発達障害当事者が図書館に対してどのようなイメージや認識を持っているのかを明らかにする。Web調査の対象はGoogle上で“図書館 発達障害”と検索した結果の中から、発達障害当事者が発言していると考えられる3件を選択した。次にインタビューについては、発達障害支援者からみた発達障害者の抱える問題の困難さや、図書館の利用目的について質問した。インタビュー対象は聾学校に勤務し臨床発達心理士でもあるA氏と、研究者であり発達障害者支援団体に所属するB氏の2名である。

#### 結果

Web調査の結果、3点について明らかになった。まず1つ目に図書館の資料的な内容については、ディスレクシアの場合は挿絵が挟んであるものや簡潔な文章のもの、または箇条書きのような単語で説明されているような図書である方が望ましいということが明らかになった。次に、図書館に対するイメージ・認識について、自閉症者にとって図書館は静かで、刺激が少ない場所として好印象を持たれているという意見が得られた。最後に、発達障害の特殊な要因については、症例はあくまで固定的なものではなく、様々な状況の変化で違いがあるということが示唆された。

A氏へのインタビューで得られた内容は3点である。1つ目は、図書館の内部に相談対応ができる部署が明確にされていないということである。図書館の組織として、相談する部署や担当者がいないとそのまま流されてしまい、次に同じ状況になっても改善されないという問題がある。対策としては、各図書館に、このような事例を相談する部署（担当者）がいる、報告する相手がいるという状況ができれば、この繰り返しを防ぐことができるのではないかと考えら

れる。2つ目は、自閉症の特性について「自閉症の場合はマイルールがあって頑固」というコメントから、自閉症の特性の一つが裏付けられた。また、マイルールがあって頑固ではあるが、理屈を通して損得勘定を明らかにすることが出来れば相手も納得してくれる可能性があるということも明らかになった。3つ目は、「サービスが0か100しかなく、極端である」ということである。日本における障害者サービス全体の傾向として、明確にサービスが必要な人には手厚くサポートを行う。しかし、その反面、ある程度自立できていると判断した相手はサービスの範囲外になってしまうということが明らかになった。

B氏へのインタビューでは、3つの事が明らかになった。1つ目は、発達障害者の個別性、個人差が大きいということである。発達障害は概念が広く、何に困っているのかがそれぞれ異なるため、問題の一般化が難しい。2つ目は、図書館員は発達障害者にとって接しやすい、理解してもらえそうな相手だというイメージがあるということである。図書館員の人柄や接し方においても、安心感を持ちやすく、居場所として求める傾向があるということが明らかとなった。3つ目は、発達障害者にとっての図書館の存在感が、こちらが予想していた以上に希薄なものであるということだ。「発達障害者の方の悩みに図書館はあんまり出てこない」ということ、そして発達障害者と接している中で、図書館についてはほぼ問題に出てこない、という旨の発言をしていた。

## 考察

調査結果から、発達障害者はそれぞれに発現する特性の組み合わせなどが異なるため、一般化することができないということが明らかになった。そのため、発達障害への対処方法を特性別にまとめたマニュアルを作成するだけでなく、発達障害当事者の知識状況と真的状況にまで踏み込んで潜在的なニーズを拾い上げることが重要であると考えられる。発達障害者にとって望ましい図書館になるために最も重要な事は、発達障害者一人一人の個別性に即したサービスであるという示唆を得ることが出来た。

この示唆を踏まえると、図書館と発達障害者の間で交互に運動することが、マニュアルのような通り一遍の対策を予め準備する「0か100か」ではない支援になると考えられる。また、その後の経過や対応の出来具合までを記録し知識として蓄積された情報を、図書館間で共有するシステムもあれば、よりサービスの向上につながるのではなかろうか。

## 結論

今回の研究の成果は、調査から発達障害者と向き合う上で考慮すべき点を明らかにしたことである。この調査結果から、図書館に求められる体制や、図書館主導の研究調査の必要性などの示唆が得られた。しかし今回の研究では発達障害者と自己申告しているWebおよび支援者の意見の調査にとどまり、発達障害当事者を直接の対象として調査を行ったわけではない。そのため、今後、発達障害当事者を対象とする調査と図書館員を対象とする調査を行い、発達障害者に対する図書館サービスのより望ましいあり方を探りたい。